

NPO「銀座ミツバチプロジェクト」理事長

銀座のビルで養蜂 高安 和夫

●聞き手 黒崎亜弓 (編集部)

「ミツバチの目線で、緑あふれる街作り」

百貨店や高級ブランド店が立ち並び、消費の一大中心地としてにぎわう東京・銀座。その一角のビルの屋上に多くのミツバチが住み始めて3年。「銀座ミツバチプロジェクト」を率いる高安和夫さんに聞いた。

ミツバチが住んでいるのは銀座のど真ん中。中央通りに並ぶ百貨店の三越と松屋の間を東に3ブロック入ったところにある、11階建ての紙パルプ会館の屋上だ。電圧機器などが立ち並ぶ隅に巣箱が3つ。ミツバチが集めた蜜を採る最盛期である4〜6月には、15万匹ものミツバチがここで暮らす。採れた蜂蜜は、銀座の菓子店やバー、レストランなどがオリジナル商品に仕立てている。

街全体を巻き込む力

銀座にミツバチとはミスマッチな感じがしますが、きっかけは。

高安 私勤める会社「アグリクリエイト」は茨城県に本社があり、減農薬や無農薬でコメや野菜を作る200軒の農家グループの流通を担っています。都会の人に食の生産現場のことを知ってもらうと同時に、生ゴミを堆肥にリサイクルするシステムを広げるため、2001年に銀座

の近くに事務所を出しました。

04年からは紙パルプ会館内に場所を借りて、「銀座食学塾」をスタートし、茨城でのコメ作り体験もプログラムに入れたのですが、茨城まで行く人はやはり少ない。何とか銀座で生産の現場を見せられないかと、紙パルプ会館常務の田中淳夫さんに「屋上を借りてコメや野菜を作りたい」と相談したのです。すると田中さんが「わずかなコメや野菜を作っても、自己満足で終わってしまう。もっと街全体を巻き込めるようなものを作るなら貸すよ」と。

そんなものがあるかな、と思っていた時に出会ったのが、岩手県に住む養蜂家、藤原誠太さんでした。05年11月のことです。藤原さんは、皇

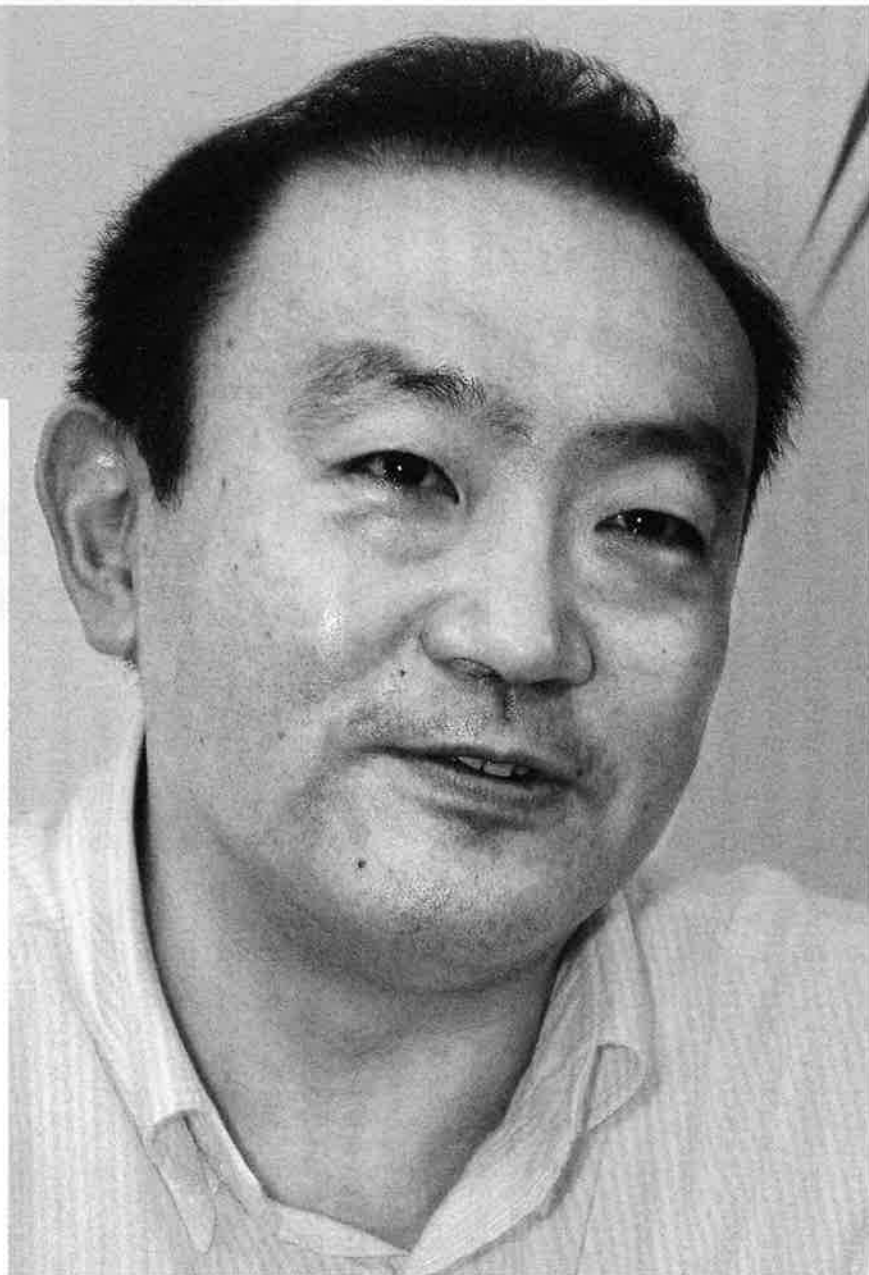
居周辺に良い蜜の採れるユリノキがあることを知って、春になると近くに巣箱を置いて蜜を採っていたのです。藤原さんに銀座でもミツバチを飼ってもらい、採れた蜂蜜を街の人に使ってもらおうと思ったら、田中さんと2人で勉強して飼ってください」と言われてしまいました。

ミツバチと聞いた時、これだ、と思ったのですか。

高安 まったくハチのことを知らなかったのに自分たちで飼うことになって戸惑いました。それでも06年3月には街の人々の協力を得て「銀座ミツバチプロジェクト」を設立。最初は藤原さんやお弟子さんにおんぶにだっこでしたが、だんだん上達してきました。

■プロフィール

たかやす かずお
1965年千葉県東庄町生まれ。89年国学院大学法学部卒業。ナショナル住宅千葉パナホーム勤務を経て、99年有限会社アグリクリエイト入社。2003年から同社取締役東京支社長。04年10月「銀座食学塾」開始。06年3月「銀座ミツバチプロジェクト」を立ち上げ、代表世話人。07年2月、特定非営利活動法人の認証を受け、理事長に就任した。



撮影=佐々木 龍

「最初は私自身も戸惑いました」

採蜜期の初めには蜜をエサとして

巣箱に残してハチを増やし、逆に蜜が少なくなると女王蜂を巣箱の中のカゴに入れて卵を産まないようにしたりして、ハチの数も調整します。今では多い時で15万匹、少ない時で3万匹くらいです。採れる蜜の量も、初年度の06年は150キロだったのが、昨年は260キロ、今年は440キロに増えました。

ハチというと、刺されそうで

危ない印象がありますが。

高安 ミツバチはスズメバチと違って、1回刺したら死んでしまいます。群れの危機だと感じれば刺すことはあり得ますが、基本的に人を刺す習性はありません。世話をする時にきちんと約束事を守っていれば、危ないことはありません。

現在「銀座ミツバチプロジェクト」の正会員は、地元のバーの支

配人やファンドマネジャー、都市計画プランナー、弁護士など18人。それに老舗の若旦那たちや趣旨に賛同する個人など約30人が、サポートとして採蜜活動に参加している。採れた蜂蜜は賛助会員に1キロ1万円に分けるシステムだ。賛助会員は、名だたる老舗・名店30店。「銀座のはちみつカステラ」などと銘打って期間限定で販売している。

当初はミツバチを飼うことに反対の声もあり、繰り返し説明して理解を得ていったという。

——銀座で採れた蜂蜜を使ってもらうというアイデアは、すぐには受け入れられなかったのですか。

高安 「君たちが趣味で蜜を採るのは自由だけれど、僕らはのれんをかけて商売しているんだから、クオリティーを満たさなければ使わないよ」と厳しく言われていました。いよいよ蜜が採れてから、「せっかく採れたので、試しに名めてみてください」といくつかの店に持っていったら、「これはいい」と。採れたての味と香りは格別だったようです。初年度に使ってもらったのは6店でしたが、今は30店に広がりました。

賛助会員には、ただ蜂蜜を使うのではなく、緑や花のあふれる銀座の街作りに参加し、ハチの面倒も見て



紙パルプ会館屋上で。巣箱のミツバチ（左：銀座ミツバチプロジェクト提供）と、蜜を採る遠心分離機

くれるよう依頼しています。そうした経験によって菓子などを作る際のインスピレーションが刺激され、また、蜜のもととなる環境へも意識が向くようです。

ここがオアシスになる

——なぜ、銀座でいい蜂蜜が採れるのでしょうか。

高安 ミツバチは半径2キロぐらいの地域に蜜源があると元気に活動します。銀座からは皇居や日比谷公園、

浜離宮などが2キロ圏内にあり、実は非常に蜜源が多い環境なのです。

また、街の中にもマロニエなど街路樹が豊富です。今はアトピーや化学物質過敏症の人が増えているので、区役所も極力、薬剤散布をしないようにしているそうです。

銀座はショッピングの中心地ですが、ハチの視点で見ると、意外に緑や花が多い環境なんですね。このことは、街の方々にとつてもうれしい驚きだったと思います。ハチが活動することで、花々の受粉が促進され、実をつける木々が増え、それを目当てに鳥たちも増えていきます。採れた蜜をひとためするたびに、今の銀座の自然が凝縮されているんだと、感慨深いものがあります。

06年10月、中央区は銀座の景観を維持するために地区計画を見直し、建物の高さを最高56メートルとした。
実は、この論議にもミツバチが役割を果たしたという。

——ミツバチと高さ制限の話はどうかかわっているのですか。

高安 ミツバチを飼い始めた06年の春、銀座では190メートルの高層タワー計画について議論が起きていました。老舗の方々のなかには、銀座に高層タワーはそぐわないという考えもあったようですが、自分たちも商

売をしている以上、街の発展を否定するわけにはいきません。ではどうするか、という時に、ミツバチが銀座でこんなにおいしい蜜を集めているよ、という話が広がったのです。

銀座には、江戸時代以来の区画がそのまま残っています。その区画に沿って季節の緑が並び、花が咲いて「銀ブラ」する人々を楽しませ、おいしい蜜も採れる。銀座の周りは汐留丸の内、月島とビル群中心の街が並び、銀座は盆地のようになっている。それだけに、銀座が都会のオアシスになるんじゃないか。上に高く伸びる開発を否定しても、違った発展の仕方があるんじゃないかという考えに行き着きました。

屋上や壁面を緑化し、季節の花を咲かせれば、緑と花に覆われた街は実現できる。ミツバチが遊びに行けるような花畑や野菜畑を銀座に作ることも、決して夢ではありません。

実際、百貨店の松屋の屋上では、野菜や花を育てる試みが始まっています。東銀座駅近くの白鶴酒造東京支社ビルの屋上には、酒米を栽培する田んぼができました。

日本には、ナントカ銀座と名のつく商店街が各地にあります。シャッター街になってしまっているところも多いでしょうが、本物の銀座が緑と花にあふれて活性化していくことで、1つのモデルになればとも思

っています。僕のような外から来た人間だけで勝手なことをしても銀座では受け入れてもらえなかったでしょうが、紙パルプ会館の田中さんが街の人に呼びかけ、僕が農業的なものを持ち込むことでミツバチが街の将来とつながったと思っています。

おいしいものを買う それが生産を支える

プロジェクトは3年目の今年、新たなイベントを始めた。ミツバチの見学会を開くとともに、各地の生産者が農産物や加工品を持ち寄って販売する「ファーム・エイド銀座2008」を、月1回のペースで開催している。

——ファーム・エイドを始めたのはどうしてですか。

高安 数百単位で蜂蜜が採れるとなると、銀座も国産蜂蜜の産地としてそれなりのシェアを占めることになりそうです（今年採れた440キログラムは国内生産の0.02%近い）。生産者の一員として、地域の生産者を応援しようという気持ちで企画しました。

メッセージは銀座食学塾の時と同じで、都会の人も生産者とながらましよう、ということですが、ミツバチが加わったことで、発信の幅がとて広くなりました。
銀座の蜂蜜を使うお店は、環境を

守るメッセージまで理解して活動に加わってくれていますが、できたお菓子を買う消費者は、まったく自由な選択として買うわけです。消費者にとつておいしいものを買って食べることが、地域の農業、食の生産を支えるのだということを、理解してもらいたいです。

——「自身も農家出身ですね。」

高安 両親は千葉県東部の東庄町で養豚業を営んでいます。僕も中学生のころから小遣いを貯めて子豚を買い、世話をしていました。両親の事業は1000頭規模ですが、僕の子豚は最大で50頭。数が少ないので、1頭1頭丁寧に世話をしました。豚は太りすぎても等級が下がる。丁寧に育てるといい価格で売れます。高校生の時には最大で100万円ぐらい貯金がありました。その後、旅行で使ってしまったが。

——「養豚業を継ごうとは思わなかったのですか。」

高安 両親への反発もありましたし、何より大変そうだった。365日、朝早くから夜遅くまで休みなしで、旅行もできないんですからね。それに、別の分野に興味がありました。

大学時代、半年ほどヨーロッパと北アフリカを旅して、多くの街が城壁に囲まれていることを不思議に感じたのです。いろいろ勉強するなか

で、ヨーロッパなどでは自然が厳しいこともあり、街全体を壁で守る必要があったが、日本では自然と共生しながら文明を築いてきたことがわかった。その思想を引き継いで、自然と人間が共生するような社会を作りたいと感じたのです。

そこで、住まいや街作りに関する仕事をしようと住宅会社に就職したのですが、入社後まもなくバブル崩壊で住宅産業をめぐる環境は厳しくなっていました。

た。たまたま好きなワインの集まりで勤める会社の社長と出会い、メンバーのコメ農家の話を聞いたこともあって、食を見直すようになり、転職しました。

結局は農業にかかわることになったわけですね。

高安 時代の違いなのでしようか。以前

は生産者と都会にはほとんどつながりがなかったのですが、今はそれができ、農業も面白いものになってきています。閉鎖的な世界だったのが開かれてきた。単に作るだけでなく、いいものを消費者に直接売る。それができる農家は伸びていきます。若いころにそういう発想があったら、多少、職業選択も違っていたかもしれません。

こうした農業の変化を背景に、高安さんはこの10月、「ミツバチ」とは別のプロジェクトとして、「銀座農業塾」を始めた。これから農業を始めようという人や企業を対象に、脱サラで農業を始めて軌道に乗せた「先輩」や、農業に関する法律や税制に詳しい司法書士、マーケティングの専門家ら、10人の講師が農業での起業について講義を行うものだ。

「ひとひねりの工夫で農業を活性化」

銀座農業塾はミツバチプロジェクトの延長線上にあるのですか。

高安 というより、ファーム・エイドの延長です。銀座食学塾を始めたころから、食を大切にしようとしてきましたが、最近、中国産冷凍キユーザや事故米流通などの事件もあ

って、人々の意識が急激に食の安心安全にシフトしています。その次に重要になるテーマは、農家の後継者なんです。今、農業を現場で支えている人は65歳がピークで、70代、80代も頑張っている。今から5年経つと、農家は激減してしまいます。

こうした状況で、制度や法律も近い将来、農業への新規参入がしやすくなるように変わっていくでしょう。それに合わせて、農業者予備軍を作っていきたいのです。

塾では、どんな分野に重点を置いていきますか。

高安 一番訴えたいのは、きちんとしたマーケティングに基づいて、生産と流通を自分でやることです。これから農業を始めようとする人には、小さい設備と面積でも高く売れる商品を作り、宅配便で都会の消費者に直販するなど、市場出荷より手取りを多くするやり方を勧めたい。

小規模でも十分な利益を得る農業という点でも、銀座のミツバチはヒントになると思います。銀座の蜂蜜は高価ですが、銀座で採れた蜂蜜というストーリー性や、蜜が採れる環境作りといったメッセージ性があり、メディアにも注目されることで、その価格が成り立つ。養蜂以外の分野でも、これからの農業では、それぞれの地域に合った「ひとひねり」が大切だと思つたのです。

